炊きたてご飯のお弁当

目が覚めると、いつもより部屋が明るいことに気がついた。

（もしかして……。）

目覚まし時計を見た。部活動の集合時間をとっくに過ぎている。祥子は飛び起きて、一階のリビングにいた母に強い口調で言った。

「どうして起こしてくれなかったの。今日は都大会前の大事な練習試合があるから必ず起こしてって、昨日あれほど言ったじゃない。」

「何度も起こしたわよ。でも、分かったと言ってまた寝てしまったのは、あなたよ。」

祥子は新チームのキャプテンに指名されて以来、練習がなかなかうまくいかないこともあって、最近はどうもイライラしがちだ。いつもは近所の人からも「姉妹みたいね。」と言われるほど仲のいい親子なのだが、この時は思わず、

「もういい。」

と、自分でも驚くくらいの大声で口答えをしてしまった。

テーブルで新聞を読んでいた父は、その様子を黙って見ていた。

朝食も食べずに急いで部活動の用意をしていると、母から、まだ温かいお弁当を手渡された。祥子は、それを引ったくるようにして受け取ると、家

を飛び出し、学校へと向かった。

祥子は中学二年生。女子ソフトボール部のキャプテンを務めている。顧問の先生は都内でも有名な指導者で、技術指導はもちろんのこと、「時間を守りなさい。」、「ユニホームは必ず自分で洗いなさい。」と、生活に関する指導についても、日頃からとても厳しかった。

汗だくになりながら顧問の先生のところへ行くと、案の定、厳しく叱られた。いつもは完食するお弁当だったが、その日はほとんど口をつける気にならなかった。

ムシャクシャした気持ちを引きずりながら帰宅すると、母が「おかえり。」と、いつものように声をかけてきた。しかし、その言葉にも応えず、祥子は黙ってお弁当箱をテーブルに置いた。それを手に取った時の重みで分かったのだろうか、母がふっと悲しそうな顔をした。その時の表情が気になりつつも、意地っ張りなところがある祥子は、その日以来、母とほとんど口をきかなくなってしまった。

◆

そんな日が続く中、道徳の授業で担任の先生から、

「君たちにとって大切なものは何か。」

と尋ねられた。クラスのみんなからは、「自分」、「命」、「友達」、「家族」など、さまざまな発言があった。

すると今度は、なぜそれが大切なのか、理由を尋ねられた。

（なぜって、自分も命も絶対に大切だし、友達はいなければ寂しいし、それから、家族は……。）

祥子の頭の中には、さまざまな思いが浮かんだ。

◆

その日、部活動を終えて帰宅すると、いつもは帰りの遅い父が既に帰宅していた。着替えて一階に下りると、

「話がある。」

と父に呼ばれた。仏壇のある和室で、祥子は父と向き合って座った。

父は、祥子がまだ幼い頃に亡くなった祖母の遺影に目をやりながら、静かな口調で話し始めた。

「父さんも祥子と同じように運動部に入っていたから、休みの日に練習があると、おばあちゃんにお弁当を作ってもらっていた。パンだとすぐおなかがすいてしまうから、ご飯にしてもらっていたんだけれど、そのご飯は必ず炊きたてだった。おかずも朝早くから作ってくれていた。でもな、おばあちゃん、朝ご飯の時、いつも自分は前の日の残りご飯を食べていたんだ。お弁当は残りご飯でいいし、おかずも前の日の残り物でいいからと、いくら父さんが言っても、おばあちゃんはいつも朝早く起きて、炊きたてのご飯と作りたてのおかずをお弁当箱に詰めてくれた。そうやって、おばあちゃんは父さんのことを大切に育ててくれた。」

そこまで話すと、父はいったん口を閉じた。祥子は黙って、父の次の言葉

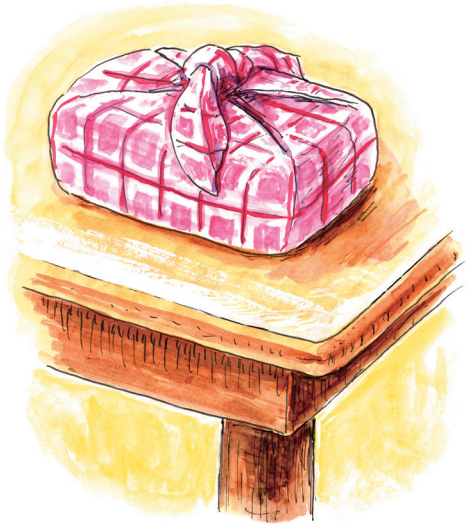
を待った。

「それと同じことを、母さんは今、祥子にしてくれているんだよ。」

ふと、この前のあの悲しそうな母の顔がよぎった。そして、その時に感じた、ちくりとした胸の痛みも……。

◆

その週末の土曜日の朝、リビングに下りていくと、テーブルの上にお弁当箱が置かれていた。手にするといつものように温かかった。

その日、部活動を終えて家に帰ると、祥子は、バッグから出したお弁当箱を手にしてキッチンへと向かった。そして、初めて自分でお弁当箱を洗った。その姿をリビングにいた母に見られたのが、少し恥ずかしかった。母は何も言わなかったが、そのまなざしが祥子にはとても温かく感じられた。

（柿沼　治彦　作）